P-45

里親のもとで養育される意義～食の観点から～

愛知新城大谷大学・吉川知巳

【はじめに】

児童養護施設には，家庭で生活できない子どもが暮らしている。近年では，子ども虐待によるものが増えている。彼らの入所前の食はおしなべて貧しい。入所後は，児童養護施設は大舎制であるから食事は給食型で「作る人」の顔が見えない。こうした彼らには，「心の栄養」が必要だ。それには，施設ではなく里親のもとで養育されるべきであろう。

【１】子どもたちの食生活

児童養護施設に入所する前は，“好きなものを好きなだけ好きなだけ好きな場所”で食べていた。おやつやインスタント物などで“すぐ”に食べられる食事だ。いわゆる「ジャンクフード」と呼ばれ一般社会では健康の観点から極力避けたい食品である。こうした食品の氾濫がネグレクトを生んだと言ってもよいかもしれない。入所後は、大舎制が大半を占めているから食事は給食型に近い。時間になると“すぐ”に提供されるのだ。入所前・後であろうが待つことなしに食事が出される状況だ。

【２】心の栄養と物理的栄養

子どもたちは，入所前・後であろうが“すぐ”に食べることが可能な食事だ。つまり、「作る人」の顔が見えない。物理的な栄養だけでは育つことは困難であろう。遠藤は「栄養だけでは子どもは育たない。人の思いを食べて育つのだ」と述べている。

【３】迎え入れの儀式と里親

遠藤は「食事は迎え入れの儀式であり、毎日、毎晩続けることが一番大切である」と述べている。里母の川上は、登校前に里子のアオイが今日は自宅にいるのかと毎日聞くと報告している。入所前の子どもは，アオイに限らず親から暴力を振るわれ、「産みたくなかった」と言われ“迎え入れ”の経験が少ない子どもである。ゆえに、子どもが好きという動機で子どもを預かっている里親のもとで養育されるのがよかろう。村木は里「里親は他の家で生まれた子どもを育てるため，家族で食卓を囲む時間を大切に、夫婦仲よくを心がけている」と報告している。岩崎は「食事作りや山のような洗濯などの対応への“繰り返し”が里子に安心感を与える」と述べている。

【４】入所児の育った家庭

彼らの家庭は，１で述べたように“好きなものを好きなだけ好きなだけ好きな場所”で食べていた。且つ、何時身体的虐待や性的虐待のような具体的な虐待が起こるかもしれない精神的な不安・恐怖心が家庭には流布している。食事だけでなく，次に何が起こるかわらない環境で生きてきたのだ。増沢は「予測可能な毎日の確実さが大切で，里親は可哀そうに思い，遊園地などの娯楽施設へ連れて行くと，落ち着きをなくす」と指摘している。ゆえに「予測可能な平凡な毎日」を里親は提供することが肝要であろう。こうした平凡ななか，一毎日の“繰り返し”を実践している里親の暮らしにおいて健康的な食生活も体得できるのではないか。

【５】まとめと補足

子どもたちは，定位家族では待つことなしに“すぐ”食べることができるジャンクフードや児童養護施設は大舎制でありから，「作る人」と「食べる人」の距離が開き，時間になると食事が提供される現状であることを考察した。そこで，「作る人」の顔が見え，３で紹介した遠藤の言う「人の思い」を食べることが可能な里親で生活することが肝要であることを提言した。

【文献】

１）小木曽宏『Ｑ＆Ａ子ども虐待を知るための基礎知識』明石書店 2009 年

２）村木和木『家族をつくる』中央公論新社 2005 年

３）伊東波津美『70 人の子どもを母親になって』法蔵館 2009 年

４）田上不二夫他『心身障害Ｑ・Ａ児童虐待』黎明書房 2005 年

４）吉川知巳「子ども虐待を生んだ諸要因と父親の役割」『保健の科学』第 45 巻第７号